様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 29 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０７２０００９６
研究課題名（和文）　東西資料によるモンゴル時代の政治・文化交流の解析と実証

研究課題名（英文）　Practical researches on the extensive exchanges between Iran and China in the Mongol period

研究代表者
宮　紀子（MIYA NORIKO）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：60335239

研究成果の概要（和文）：
13-15 世紀にペルシア語、漢語等で著された文献を収集、当時の多言語辞書を利用して分析し、以下の新事実が判明。①モンケがフレグ大王のもとに常徳を派遣した目的は東西の薬草の名前の統一にあった②Nasīr al-din Tūsī に中国の歴史と天文学を教えた医師の名は傅野③14 世紀初頭にペルシア語に翻訳された中国の医学書 *Tanksūq nāmah* の原本は李駉の『晞范子脈訣集解』十二巻④和算の発展はモンゴル初期における東西学術交流の延長⑤ケシク制度の原型は匈奴に遡る⑥ブラルグチの重要性⑦クビライの宰相アフマドもブラルグチの長官⑧アフマド暗殺は江南の富の掌握をめぐる皇太子チンキムとの権力闘争の結果。

研究成果の概要（英文）：
I accumulated various documentary records and visual materialswhich were written in various languages from 13th to 15th century. By using multilingual dictionaries of those days, I analyzed them in detail. As a result, I ascertained some concrete new facts. Firstly, A Chinese doctor lectured the outline of Chinese history and Astronomy to Nasīr al-din Tūsī who was a minister in early Hülegü ulus and famous as a scientist. The doctor's name is Fuye 傅野. Secondly, Müngge Qa'an dispatched Changde 常徳 to his little brother Hülegü in the Middle East. The real purpose of the dispatch was the comparison and unification of the medicinal herbs between Eastern and Western World. Thirdly, it is obvious that the original of the Chinese medical Journal *Tanksūq nāmah* which was translated into Persian at the early-14th century, is *Xifanzi-Maijue-jijie* 晞范子脈訣集解 written by Lijiong 李駉. Fourthly, Japanese mathematics "Wasan" in Edo period developed on the basis of the fruit of scientific exchange between East and West in the early Mongol period. Fifthly, the existence of the origin form kešik system in Mongol Court was recognized in the Huns 匈奴 and successive nomadic dynasties which rose and fell in Eurasia. Sixthly, in Mongol Court, buralqči had extremely huge power. Seventhly, there is strong possibility that Ahmad who was a minister of Qubilai was the director of buralqči. Eigthly, it is conceivable that the reason why Ahmad was assassinated was the keen dispute over the grasp of the wealth of Southern Provinces 江南 between the Crown Prince Chinkim and him.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：ペルシア語古写本、漢籍、抄物、ユーラシア、モンゴル時代、大元ウルス、フレグ・ウルス、東西交流

１．研究開始当初の背景

13 世紀初頭、チンギス・カンの登場によって幕をあけたモンゴル時代は、モンゴル人の文化に対する無理解、「四階級制」による漢族文人の冷遇などにより、中国の伝統文化・価値観が徹底的に破壊された「暗黒時代」として語られてきた。いっぽうで、元曲や平話といった口語を用いる新たな分野がめざましい発展をみせた。この一見相反する事象を整合的に説明しようとするため、鬱屈した文人がエネルギー発散の場として「民間文学」の場に参与したという図式がながく受け入れられてきた。また、じゅうらいの研究では、大元大モンゴル・ウルス治下の朝廷や地方の各機関のじっさいの職務、運営システム・科挙制度など基本的な事柄の把握さえ、きわめて不充分であった。しかし、この約十数年のあいだに、国外、とくに中国の資料の閲覧条件が好転したうえ、未公開だった文献の出版が相次ぎ、考古・美術資料、遺蹟の発見・発掘・公開が急速に進んだ。また、さいきん韓国で発見された元刊本『至正条格』は、『元典章』、『通制条格』などの続編ともいうべき資料で、1320 年代以降のモンゴル朝廷の諸制度を理解するうえで貴重な手掛かりを与えてくれることとなった。モンゴル自らの手によって書かれたとうじの朝廷の骨格・歴史を解き明かすペルシア語の根本資料の研究も進展、専門書、概説書もいくつか公刊された。モンゴル時代の研究状況はきわめて恵まれたものとなった。「破壊者」としてのモンゴル帝国像は見直しを余儀なくされつつある。そうした趨勢のなかで、研究代表者は『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会 2006 年）において、大元ウルス治下の文化政策と出版活動を、朱子学関連の書物、口語語彙をもちいた書物、挿絵入りの書物、とうじの世界観があらわれる地図と地誌に焦点をあて、同時代の高麗・日本はもとより、のちの明・清・朝鮮・日本への影響も視野にいれながら、多角的に分析した。通俗的と見られがちであった口語語彙をもちいた啓蒙書や絵本がモンゴル朝廷の現職の高官等によって国家の儒教文化政策の一環として刊行されていたこと、全国的に儒学教育の普及がはかられる中で、14 世紀江南地区において官民共同の出版が爆発的な展開をみせたことなどの諸点を指摘し、文化の発展にモンゴル朝廷が大きな役割を果たしたことを実証した。しかし、広大な版図を有したモンゴル時代の闊達な文化・有意性・明代の殺伐とした政治状況と文化の急激な凋落という新たな事実は、先行の学説、自らが設定した極めて狭い範囲の研究分野・文献の世界に安住している人々にとっては容認しがたいものらしく、基本文献も確認せず感情論としか思えないような批評もいくつか出ている。ならば、誰が見ても一目瞭然の地図や絵画等をもって納得せしめるしかあるまい。そこでまず『ＮＨＫスペシャル文明の道⑤モンゴル帝国』（ＮＨＫ出版　2004 年）、『モンゴル帝国が生んだ世界図』（日本経済新聞出版社　2007 年　金臑泳訳『朝鮮が描いた世界地図：モンゴル帝国の遺産と東アジア』笑臥堂　2010 年）において、「混一疆理歴代国都之図」という一枚の世界図を手掛かりに、14 世紀当時、広大なモンゴルの版図とその周辺の国々で共有されていた「知」のありようとそのごの変化を、さまざまな文献・文物を以って示した。いっぽう、こうした作業の過程で、やはりペルシア語文献の利用の必要性が身をもって痛感されたため、当該言語を中心に諸言語の習得にもつとめてきた。その結果、同時代のペルシア語文献の中に、モンゴル朝廷を介しながらさまざまな文学作品や学術書がユーラシア世界で相互に伝来していたことを示す記述がしばしば見られること、中国から伝来した書物の翻訳に関する資料がのこっていることがわかってきた。これまで研究代表者が蓄積しこれからも継続していく国内外の漢籍調査のデータとペルシア語・アラビア語等の諸言語の資料を両方用い照合していくならば、そしてこれまでほとんどなされていない中東・中央アジア・欧米の各所蔵機関の漢籍調査を進めるならば、中東方面のフレグ・ウルス（いわゆるイル・カン国）、中央アジアのチャガタイ・ウルス、ロシア方面のジョチ・ウルスはてはヨーロッパ諸国にどれだけの、どのような漢籍や文物がもたらされていたのか、どのような人々が関わっていたのか、書物を中心とする「知」の東西交流の実証が可能である。フレグ家、チャガタイ家、ジョチ家は、モンゴル勃興期より大元ウルスの版図内にも投下領とよばれる所領を有していたが、当該地の人々の出入や人脈、出版物、商業にかかわる漢文資料の収集、データの抽出作業が有効な手段となるはずである。また、ペルシア語・アラビア語の写本に附されたミニアチュールには、モンゴル以前には見られない中国絵画の影響が濃厚に見えるばかり

でなく、とうじの陶磁器・ガラス製品をはじめとする美術工芸品や服飾、モンゴル朝廷によって広められた諸制度などにおける東西交流の証拠がそのまま描かれている。これらの資料を有効に利用して、机上の空論、漠たる印象論ではないモンゴル時代の政治・文化の大交流、モンゴルが世界史の文脈の中で果たした役割を具体的な形で実証していきたいと考えた次第である。

2．研究の目的

本研究は、中国・朝鮮・日本に遺された漢文を中心とする一時資料ユーラシア東西を結ぶ多言語原典資料すなわちペルシア語・アラビア語・モンゴル語等で書かれた同時代資料のほか、考古遺跡の報告書・出土文物・絵画・陶磁器・ガラス細工・彫刻品などありとあらゆる遺物を用いて、東は日本から西はイベリア半島にいたるまで、13－15 世紀にモンゴル朝廷の主導によって大規模に展開された政治、文化上における交流のありさまを詳細に検討、モンゴルの登場によって各地域・各分野で何がどう変わったのか、目に見える形で具体的に逐一示し、実証していくことを目的とする。同時にこの作業は、不備が多いことで知られる『元史』の再編纂のための基礎研究、準備研究の意味をもつ。具体的には、モンゴル時代とその前後の政治、文化（数学・天文・農学・薬学・医学・工学などのさまざまな科学技術分野、文学・美術・工芸・宗教等）の変化を、東西の資料の収集・解析によって、中国と朝鮮・日本・中東ではとくに資料の多いフレグ・ウルス、ティムール朝との交流を中心に、「人」「モノ」「情報」「交通」などの視点からひとつひとつ明らかにしていく。従来知られていない資料の発見・紹介も主要な目標である。そして、モンゴルが世界史において遺したものは何なのか、たとえば、ケシク、ジャムチ、イクターやワクフ制、水利・勧農事業といった特記すべき諸々のシステムや様々な儀礼を世界史の文脈の中できちんと分析しなおすこと。また、この時期の世界的な傾向としてヨーロッパ・イスラーム・中国でさかんに百科事典や文書・書簡の範例集が編集されているが、そこに集積された知識は、東西交流を考えるうえでも有効な資料であり、それらの最良のテキストの収集、比較分析も行う。

3．研究の方法

国内外での東西原典資料の収集と整理。13－15 世紀の漢文資料、ペルシア語・アラビア語資料の調査・収集につとめた。モンゴル時代以前（プレ・モンゴル期）は東西共通して遺された文献がきわめて少量だが、ミニアチュール、陶磁器、ガラス製品などは、モンゴル時代の文化の飛躍の証明にまたとない証拠なので、それらのカタログ、発掘報告とともに収集した。東西交流の機会が減少するポスト・モンゴル期についても同様の作業を進めた。

漢文資料については、元刊本を中心に、それを覆刻、重刊した明刊本・朝鮮版・日本の五山版・抄本なども含めて、未公刊の各種資料を徹底的に調査・収集した。じゅうらいからの京都建仁寺両足院、京都大学付属図書館の清家文庫での調査と南北朝・室町時代の諸記録との照合、関連記事の抽出作業を継続。同時に東洋文庫や京都大学人文科学研究所に所蔵される膨大な中国歴代の地方志から、さらには拓本をはじめとする石刻資料、朝鮮資料、日本の抄物等から大元ウルス時代の記事を抽出・整理し、各地の発掘報告書のデータ収集も進めた。また、北京大学歴史学系の招聘を受け、一ヶ月間の学術交流の機会を与えられたので、中国国家図書館、北京大学図書館で典籍・拓本の閲覧・調査をおこない、さらには北京市内および郊外の金・大元時代の遺跡、博物館等を訪問、多くの知見を得た。

そのいっぽうで、『集史』をはじめ、モンゴル時代にかかわる主要なペルシア語古写本やヨーロッパ諸言語による年代記等の同時代資料の収集を行い、紙焼き・マイクロフィルム等からのカラー複写（モノとしての資料を意識できるだけ原寸大に復元）、製本等を志を同じくする研究者とともに集中して行った。さらにテヘラン・カイロ等で出版されている校訂本の収集にもつとめた。歴史史料・百科事典はもとより、フレグ・ウルスやインドの各王朝において編纂された多言語の辞書――各種資料の翻訳・分析に必須――を重点的に集めた。

さらに、13-15 世紀のヨーロッパとフレグ・ウルス、ジョチ・ウルスの交流にも視野を広げ、1800 年代後半以来、フランス・ドイツ・イタリアの各雑誌に掲載・報告された文書資料やヴェネツィアやフィレンツェの商人等が書いた報告書・年代記等の典籍類も収集した。

4．研究成果

チンギス・カン西征以降の中央アジア情勢について、これまでに収集してきた漢文資料（典籍・碑刻）や抄物等の情報をペルシア語資料と徹底的に比較・照合した。その成果の一端を三本の論文に纏め『ユーラシア中央域の歴史構図　13～15 世紀の東西』と題する論文集に寄稿した。いずれもモンゴル時代の東西交流を実証する有名な根本文献を再分析したものである。フレグ・カンとその政治・文化顧問で、マラーガの天文台建設でも知られるナスィールゥッディーン・トゥースィーのもとに仕えた中国人学者の名前、モンケ・カアンの命令でフレグのもとに派遣された

常徳の目的等を新資料によって明らかにしたほか、現在は散逸している中国医学書のペルシア語翻訳で、14世紀中国語の音韻資料としても有効な *Tanksūq nāmah* の原本を日本の抄物資料から確定、使用文字が実はアラビックとネストリウス派のシリア文字であることも指摘した。ただ、発行部数が300部と比較的少数であったこともあろうか、現時点において国内外ともに書評はなされていない。とくに日本史、数学史、西南アジア史等の分野からの反応を待っている段階である。

また、江戸期の和算がモンゴル時代初期における東西学術交流の成果の上に発展したことを、華北で一大勢力を有した道教教団全真教がのこした資料および日本の抄物等を利用することによって実証し、じゅうらいの数学史の問題点のいくつかを指摘・解消する口頭発表を二度に亘って（関西大学東西研究所、京都大学理学部数学科）行った。文学・陰陽学・医学・薬学・天文学・数学・地理学などあらゆる分野を包括、修得しており、モンゴルの各ウルスの政治顧問となっていった東西のテクノクラート集団の動向を同時に辿る試みは、これまでまったくといっていいほどなされていなかった。金朝末期からモンゴル初期にかけての華北の学問が山東、朝鮮、対馬を経由して日本に流入していたこと、同時に華北の文官がとうじの日本についてそれなりの知識を有していたことも、じゅうらい指摘されていなかった事実である。

さらには、三年間で収集した資料を踏まえ、東西のモンゴル朝廷を通じて、その基本たる国家体制・軍事・行政を解き明かすカギとなるケシク（カアン・諸王を取り巻く側近・侍衛）制度から、まずはマルコ・ポーロの『東方見聞録』にも紹介されるブラルグチをとりあげた（モンゴル時代の二大資料群たるペルシア語資料、漢籍には、テュルク・モンゴル語語彙が音訳・意訳のかたちで相当量遺されている。それらの解明こそ匈奴以来現在にいたるまでのユーラシアの遊牧国家を理解するうえで最初の且つ必須の作業である）。ラシードゥッディーンの『集史』、同じくフレグ・ウルスにおいて編纂された各役職の任命書集『書記規範』、大元ウルス側の政書である『元典章』『通制条格』『至正条格』等の記事、同時代の碑刻を詳細に比較、検討した結果、①大元ウルス治下、一見、『周礼』に法った中華風の官職名を踏襲していても、すべてケシク集団が基本となっていたこと、②しかもその伝統・システムは、歴代の鮮卑拓跋国家、はては匈奴国家にまでさかのぼること、③モンゴル時代の数々の政変の背後には、ブラルグチ、バウルチ、シャルバチ等各ケシク集団の争いが潜んでいること、④ブラルグチがカネと権力を握った理由等、じゅうらいの一言語資料、一分野に限定された研究からはみえてこなかった事実がいくつも明らかとなった。

ひるがえって、大元時代に編纂され、絶えず増訂されつづけた百科事典『事林広記』は、朝鮮王朝や江戸時代の人々の文化面で大きな影響を与えた書物だが、その初版に近いテキストを、対馬宗家旧蔵（長崎県立博物館蔵）、比叡山延暦寺所蔵において２種、再発見することができた。ここには、じゅうらい知られていなかったモンゴル朝廷の官制をはじめとする貴重な根本データが多数含まれる。この報告は、中国でも時をおかず翻訳・紹介された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 宮紀子、ブラルグチ再考、東方学報、査読有、86、2011、pp. 47-1.

② 宮紀子、全真教からみたモンゴル時代の東西交流――和算の来た道――、橋寺知子・森部豊・蜷川順子・新谷英治編『アジアが結ぶ東西世界』、査読無、2011、pp. 25-45, pp. 136-138, p147, pp. 151-160.

③ 宮紀子、東から西への旅人：移剌楚才――『西遊録』とその周辺、 窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図』 、査読無、2010、 pp. 129-166.

④ 宮紀子、東から西への旅人：常徳――劉郁『西使記』より、 窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図』、査読無、2010、pp. 167-190.

⑤ 宮紀子、*Tanksūq nāmah* の『脈訣』原本を尋ねて――モンゴル時代の書物の旅」、窪田順平編『ユーラシア中央域の歴史構図』 、査読無、2010、pp. 191-218.

⑥ 宮紀子、陳元靚『博聞録』について、 汲古、査読有、56、2009、 pp. 13-18.

⑦ 宮紀子撰・喬暁飛訳、新発現的両種『事林広記』、 版本目録学研究、査読有、1、2009、pp. 180-227+1pls.

⑧ 宮紀子、『農桑輯要』からみた大元ウル

スの勧農政策（下）、人文学報、査読無、96、2008、pp. 101-125.
http://hdl.handle.net/2433/71075

⑨ 宮紀子、叡山文庫所蔵の『事林広記』写本について 、史林、査読有、91-3、2008、pp. 1-41.

⑩ 宮紀子、対馬宗家旧蔵の元刊本『事林広記』について、東洋史研究、査読有、67-1、2008、pp. 35-67.

〔学会発表〕（計 3 件）

① 宮紀子、関於三百年前日本博多聖福寺出土的銀錠、北京大学歴史学系講演会、北京大学歴史学系(中国北京市), 2009. 5. 27

② 宮紀子、関於蒙元時代的典籍、北京大学歴史学系講演会、北京大学歴史学系(中国北京市), 2009. 5. 20

③ 宮紀子、全真教からみたモンゴル時代の東西交流――和算の来た道――、関西大学三研究所（東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所）公開合同シンポジウム「アジアが結ぶ東西世界」、関西大学東西学術研究所（大阪府吹田市）、2008. 9. 27

〔図書〕（計 1 件）
窪田順平編/小野浩・杉山正明・宮紀子著、ユーラシア中央域の歴史構図――13～15 世紀の東西、総合地球環境学研究所、2010、466p.

〔その他〕
第五回日本学術振興会賞受賞
第五回日本学士院学術奨励賞受賞

6．研究組織
(1) 研究代表者
宮　紀子（MIYA NORIKO）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：60335239